

## 平成21年度重点プロジェクト事業（海外派遣研究員等旅費）報告

### ヨーロッパ・スポーツ社会学会における研究動向

北村尚浩\*，川西正志\*，横山茜理\*\*

#### はじめに

ヨーロッパ・スポーツ社会学会（European Association for Sociology of Sport: EASS）は、ヨーロッパにおけるスポーツの社会科学研究を促進し、EU や欧州会議に対して科学的な助言を行なうことを目的として、2001年に設立された歴史の浅い学会である。これまでに6回の学会大会（オーストリア・ウィーン：2002年，ポーランド・ジェシユフ：2004年，フィンランド・ユバスキュラ：2006年，ドイツ・ミュンスター：2007年，スロベニア・ブレッド：2008年，イタリア・ローマ：2009年）が開催されている。

本稿では、2008年5月22日から25日にかけて、スロベニア共和国ブレッド市で開催された第5回大会（リュブリャナ大学スポーツ学部主管）と2009年5月27日から30日にかけて、イタリア共和国ローマ市の Comitato Olimpico Nazionale Italiano（イタリアオリンピック委員会，CONI）のスポーツ教育研究センターで開催された第6回大会の概要と、それぞれの大会での発表テーマを通して、ヨーロッパにおけるスポーツ社会学の研究動向について報告する。

#### 一般発表

各大会のセッションテーマと発表演題数をそれぞれ表1と表2に示している。第5回大会のメインテーマは“Sport, Culture & Society”で、ヨーロッパ諸国をはじめ、アジアや北南米地域などから100名を超える研究者が参集した。演題数はポスターセッションを含めて99演題で、2007年にドイツのミュンスターで開かれた第4回大会の147演題と比べると、およそ3割少なかった。日本からも筆者らの他、神戸大学、大阪体育大学の研究者、大学院生など5名が参加し、精力的に研究発表を行った。

筆者らは、川西が Youth Sport のセッションにおいて、“Outdoor Play Intention and Physical Activity of Children in a Model Community as the Japanese Practical Projects to Improve Child Fitness”



写真1 第5回大会参加者（リュブリャナ市内にて）

\*鹿屋体育大学生涯スポーツ実践センター

\*\*秋田銀行

の演題で、子どもの体力向上実践事業の実施地域における、子どもの外遊び志向と身体活動状況との関連について報告した。子どもの体力低下は世界各国で共通の課題であり、日本の体力向上事業に対して聴衆も高い関心を示したようであった。

一方、北村は Reasons for Sport Participation のセッションで “Achievement Goals and Reasons Canadians Learn Martial Arts” の演題で発表した。カナダにおける武道参加者の達成目標と参加動機との関連について報告したもので、柔道のようにグローバル化が進む日本の武道が、海外の参加者たちにどのように受け入れられているのか、といった視点から分析を加えた。ドイツやフランスに見られるように、柔道はヨーロッパでもポピュラーな種目であり、質疑応答では国際比較的な分析視点についてのアドバイスも受けた。また、博士論文に向けて武道参加者を研究しているというベルギーの大学院生とも、交流を持つことができた。

一方、第6回大会はメインテーマを “Sports, Bodies, Identities” として、イタリア、ドイツを中心とするヨーロッパ諸国やアメリカ、オーストラリアなどから約200名が参加し、総演題数は136

表1 第5回大会のセッションテーマと演題数

セッションテーマ	演題数
Sport & media	6
Reasons for sport participation	6
Sport & politics	6
Organization of sport subjects	5
On sport sociology	4
Youth sport	13
Sport & gender	3
Theoretical representations & frameworks	5
Sport & tourism	3
Sport by & for university students	4
Elite coaching	5
Sport, nationality & citizenship	3
Sport & health	10
Elite athletes	5
Sport & national identity	4
Sports fans	4
Sport & violence	5
Poster session	8
Total	99

に上った。日本からは、筆者らのほか神戸大学、北翔大学の研究者、大学院生らが参加し、研究発表を行った。

川西と横山は、Physical education のセッションで、それぞれ “Social environmental factors influences to physical activity of children in a model community as the Japanese practical project to improve child fitness”, “The relationships between attitude towards physical education class of junior high school students and their sports preference” の演題で発表した。川西の発表は、前年に引き続き、子どもの体力向上実践事業実施地域の子どもの生活時間と身体活動量、運動強度の調査結果を詳細に報告するものであった。また、横山の報告は、中学生の体育授業に対する態度とスポーツの選好の関連についてのもので、いずれも近年の日本で問題となっている子どもの体力低下を研究の背景とするものであった。フロアの関心も高い話題と思われたが、他の演者のDVD再生のトラブルや発表時間の超過などのため、内容に関するディスカッションの時間がほとんど取られなかったのが残念である。

北村は Activities and 'sportized bodies' のセッションで “The factors determining achievement goals of martial arts participants in Canada” の演題で発表した。この発表も、前年に発表したカナダの武道

表2 第6回大会のセッションテーマと演題数

セッションテーマ	演題数
Physical education	8
The realm of media	7
Sport, body & socialization	11
The body in the social integration processes	10
Activities and “sportized bodies”	8
Sport, body and bio politics	9
Body & health	7
Top-level sport and sport for all bodies	9
Economy of sport and body	11
Sport and body: culture and identity	12
National sport systems and emerging transnational challenges	13
Sport, body and gender	11
Poster session	20
計	136

参加者に関するものであったが, 本研究を含めて武道を扱った演題が5演題あり, ヨーロッパにおける武道研究への関心の高さを感じさせられた。



写真2 発表の様子(第6回大会, CONIにて)

## おわりに

2回のヨーロッパ・スポーツ社会学会への参加を通して, ヨーロッパにおけるスポーツ社会学の研究動向を検討してきた。人やモノが自由に行き来できるEU諸国間ならではの研究課題も多くみられ, 興味深い。また, ヨーロッパの学会でありながら, アジア, 北米など世界各地の研究者に発表の機会が開かれており, ヨーロッパ以外の研究動向に関する関心の高さも感じられる。

最後に, 本学会大会への参加, 発表にご理解とご支援をいただいたことに, 感謝の意を表したい。

## 発表演題に見る研究動向

第5回大会では Youth sport のセッションに属する演題が13演題(14.3%)と最も多く, 次いで Sport & Health の10演題(11.0%)であった。そのほか, メディアや参加動機, 政策などを扱ったテーマもそれぞれ6演題(6.6%)みられた。青少年や健康問題に対する関心の高さが窺える。また, Sport, nationality & citizenship や Sport & national identity のようなナショナリズムを反映するようなテーマも合わせて10演題(11.0%)あった。

一方, セッションテーマが多少絞られた感がある第6回大会では, National sport system & emerging transnational challenges や Sport & body: culture and identity が合わせて25演題(21.6%)にのぼった。大陸内で多くの国が国境を接しているヨーロッパならではの研究テーマと言える。また, 社会化やジェンダーといったオーソドックスなテーマを扱った研究もそれぞれ11演題(9.5%)みられた。スポーツの経済的背景を扱った研究も11演題(9.5%)みられ, ヨーロッパ経済におけるスポーツの関心の高さも窺い知ることができる。